

彼岸花の里づくりプロジェクト事業の現状と課題

－国史跡上淀廃寺跡を彼岸花の咲く丘に－

長谷川 明洋（上淀白鳳の丘展示館副館長）

1. はじめに

（1）地域の概要

彼岸花の里づくりプロジェクト事業（以下「プロジェクト事業」という）が行われている場所は、中国地方最高峰大山の北西麓に位置する鳥取県米子市淀江町福岡地内である。この地域は、半径1km以内に弥生時代の国内最大規模の集落遺跡「妻木晩田遺跡」、古墳時代後期の山陰地方を代表する古墳群「向山古墳群」と重要文化財の「石馬」、更に国内最古級の彩色仏教壁画を出土した飛鳥時代の古代寺院遺跡「上淀廃寺跡」という時代の異なる三つの国史跡が集中している。

日本の古代史における地方の変遷を辿るうえで、国内的にも稀有で、大変興味深い地域と言える。又、上淀廃寺跡の丘から眺める淀江平野は、日本海と三方を低い山並みに囲まれたのどかな田園風景が広がり、昔から連綿と受け継がれてきた人々の暮らしを容易に想像できる場所でもある（図1）。



図1 海上から写したこのエリアの航空写真

（2）地域づくりの活動拠点

平成3年4月に同町福岡地内の上淀集落の上方にある古代寺院跡から彩色仏教壁画が出土した。この壁画は、法隆寺の金堂壁画と並ぶ国内最古級の壁画であることが分かった。それ以降、毎年のように発掘調査が行われ、平成8年にこの古代寺院跡は「上淀廃寺跡」として国史跡に指定された。そして、平成23年4月に旧淀江町歴史民俗資料館を一部増築、改装した上淀白鳳の丘展示館（以下「展示館」という）が上淀廃寺跡のガイダンス施設としてオープンした（図2）。

同時に展示館の管理運営は、米子市や地元民間企業等が出資する第三セクター（株）白鳳で指定管理されることとなった。指定管理者の（株）白鳳では、展示館を上淀廃寺跡のガイダンス施設であるとともに

【展示館の概要】

・ 所 在	米子市淀江町福岡977-2
・ 構 造	鉄筋コンクリート1階建
・ 床面積	603㎡



図2 上淀白鳳の丘展示館の全景

に、地域の歴史文化を活用した地域づくりの活動拠点施設として位置づけ、周辺遺跡の現地ガイドをはじめ、この地域で開催されるイベントに積極的に参加していった。

この様な背景や経緯から、プロジェクト事業は、展示館を活動拠点に（株）白鳳の指定管理業務の一環として平成26年度にスタートした。

2. プロジェクト事業の誕生

（1）彼岸花に着目

上淀廃寺跡は、上淀集落の上方にある丘を削平し、その中央部に中心伽藍を、隣接する高低差の異なる丘に鐘楼、政所等の附属建物が配置されている。このことから寺院跡の背後には段差の異なる法面（斜面）が幾重にも重なり、史跡の景観全体のかかなりの部分を占めている。何度も、何度も現地に足を運び、



図3 上淀廃寺跡の景観



図4 彼岸花

上淀廃寺跡の景観形成を考えているうちに、古代寺院のイメージとこのロケーションに似合う花として、秋になると赤い花を咲かせる彼岸花が頭に浮かんできた。又、この花は、秋になると淀江平野の各所で見かけられ、この地域の初秋を彩る風物詩にもなっている。これらのことから彼岸花をツールにした「彼岸花の里づくり」の事業プランが生まれた（図3、4）。

（2）プロジェクト事業の構想

1) プロジェクト事業の基本方針

最初にプロジェクト事業の構想を策定する段階で考えたことは、次の3つの基本方針であった。

- ①プロジェクト事業を単なる一過性のものとして取り組むのではなく、3年、5年、10年といった中・長期的なスパンで取り組んでいくこと。
- ②プロジェクト事業を地元住民や民間の有志と関係行政機関と指定管理者の3者で構成する実行委員会を結成し、事業の実施主体とすること。
- ③住民参加を呼びかけながら、できるだけ多くの人たちとともに彼岸花の里づくり運動を拡げていくこと。

これらの三つの柱を基本に具体的な活動として、彼岸花の球根を収集すること、彼岸花の球根を植栽すること及び彼岸花の咲く時期にイベントを開催することを年次的、計画的に実施することとした。

2) プロジェクト事業のねらい

プロジェクト事業は、上淀廃寺跡を中心にその周辺エリアを彼岸花の里にしていくことを目標に掲げ、その中心となる事業が上淀廃寺跡の法面に沢山の彼岸花を植栽し、上淀廃寺跡を彼岸花の咲く丘にすることであり、そのねらいは、次のとおりである。

- ①上淀廃寺跡の法面の維持保全と景観形成に役立てること。
- ②上淀廃寺跡の知名度や認知度を高め、このエリアの遺跡や歴史に関心を持つ人々を増やしていくこと。
- ③史跡の集中するこの地域全体のグレードを高め、より多くの人がこの地を訪れ、地域の賑わ

いや活力のある地域づくりに貢献すること。

しかし、平成26年1月の時点では、プロジェクト事業は絵に描いた餅に過ぎず、その計画を実現するための予算も、人もノウハウもなかった。

3 プロジェクト事業の実施

(1) 実行委員会の結成と財源の確保

新たな事業を始めるときに必要なものは、具体的な事業プランとそれを実行していくための「人材」と「財源」であり、最初に着手したのがプロジェクト事業の実行委員会の結成だった。プロジェクト事業の主旨に賛同し、共に実施する仲間を集めた。結果的に地元や民間の有志から15名、関係行政機関から4名のメンバーと展示館の職員2名で構成する彼岸花の里づくりプロジェクト実行委員会（以下「実行委員会」という）を結成することができた。

実行委員会の事務局は、展示館の職員が担当することとした。事務局では、彼岸花に関する様々な知識や情報を収集しながら、事業の実施に向けた具体的なプランを策定していった。

一方の財源の確保については、当初0予算からのスタートであり、専ら県や市の公募型の助成事業の活用と協賛金、自主財源などで賄うこととした。その事業規模は、次のとおりである。とにもかくにも、限られた人員と財源のなかで、プロジェクト事業の実施条件を整えることができた（表1）。

(2) 彼岸花の球根と植栽ボランティアの公募

実行委員会は、上淀廃寺跡に植える彼岸花の球根の提供者と植栽ボランティアを市の広報誌やマスコミによる情報発信、公共施設等へのチラシの配布な

表1 事業予算額

年 度	予算額
平成26年度	153,000円
平成27年度	165,000円
平成28年度	438,000円
平成29年度	417,000円



図5 球根・ボランティア募集のチラシ（平成29年）

どにより公募した。この公募方式は、当初実行委員会の中にはその効果を疑問視する声もあったが、実施してみると初年度だけで約6,000個の彼岸花の球根が集まり、80人を超える植栽ボランティアを確保することができた。球根の提供者の中には、島根県の松江市や浜田市から展示館に直接球根を送り届けてくれる者もいた。

又、植栽ボランティアには、高齢者から若年者、家族連れ、小学生等の幅広い年齢層のボランティアが集まった。更に、史跡に隣接する高校の生徒や平成29年度からは保育園の園児たちも参加している。彼岸花の球根とボランティアの公募は、上淀廃寺跡と多数の協力者を結びつける新たな絆を生み出すこととなった。次年度以降もこの公募方式を取り入れたことにより、プロジェクト事業に関わる人たちの輪を年々広げていくことになった（図5）。

(3) 彼岸花の植栽事業（図6、7、8）

彼岸花の植栽方法は、上淀廃寺跡の法面に20cm間隔で小さな穴を掘り、その穴に彼岸花の球根を入れ、腐葉土をかけるという方法である。当初は植栽作業を安易に考えていたが、実際には大変な作業だった。

固い法面に何千個もの穴をあける作業は、大変な労力を必要とした。しかし、実行委員会のメンバーの協力やその方法を工夫することによって、植栽日の前日までに事前作業を完了することができた。当日は、参加者の意気込みもあり、植栽作業は大変スムーズに行われた。参加者にも植栽作業の実体験と

表2（4年間の実績）

・ 植栽面積	約1,500㎡
・ 植栽球根数	約23,000個
・ 植栽参加者	のべ431人、のべ21日
・ 球根提供者	76人



図6 彼岸花の植栽風景（その1）



図7 彼岸花の植栽風景（その2）



図8 彼岸花の植栽風景（その3）

イノシシ対策。ただ今実験中…！

事業を始めて2年目の冬に史跡の一部が掘り起こされ、芝生が荒らされた。これは餌となるミミズを求めてイノシシが掘り起こしたものと考えられた。若しかすれば彼岸花は毒草でミミズがいらないため、野ネズミやモグラも穴を掘らず、従ってイノシシも近寄らないのではと考えた。翌年からイノシシが掘り起こした場所に試験的に彼岸花を植えているが、現在まで、その場所でのイノシシの被害は確認されていない。

秋になると彼岸花が咲くという楽しみを提供することができた。又、植栽作業の休憩時には学芸員によって、国史跡上淀廃寺跡のガイドも行った。

これまでの実績をまとめると、表2のとおりである。

（4）彼岸花まつりの開催（図9、10、11、12）

平成26年度、27年度はこの地域周辺の彼岸花を巡るウォークを開催し、3年目の平成28年度には、初めて「彼岸花まつり」を開催した。この年は、あいにく台風の影響で野外イベントは中止せざるを得なかったが、彼岸花まつりの関連イベントとして実施した「彼岸花の里俳句大会」と「彼岸花のある風景写真コンクール」には、80句の俳句作品、88作の写真作品の応募があった。平成29年度は、この2つの関連イベントの他に、休憩所の設置、史跡ガイド、地元産の果物や野菜を販売するマルシェやお茶席を



図9 彼岸花の咲く上淀廃寺跡（その1）



図10 彼岸花の咲く上淀廃寺跡（その2）



図11 彼岸花まつりのマルシェ



図12 日本海新聞 平成29年9月26日掲載

設け、来訪者に変大好評だった。これまでは毎年9月中の上淀廃寺跡への来訪者が数百人にとどまっていたが、平成29年度は好天にも恵まれ、開花期間中だけでも1,500人を超える来訪者があった。

4. 活動の成果と今後の課題

(1) これまでの成果

初めての試みばかりで、手探り状態の中で活動を続けてきた4年間であったが、これまでの活動を振り返ってみたとき、当初の予想を超える様々な成果があった。具体的な成果としては、次のようなことである。

- 1) 彼岸花の咲く頃になると、これまでは見かけることのなかった家族連れや若者、俳句同好者やアマチュア写真家などの多くの人々の姿を上淀廃寺跡で見かけることができたこと。
- 2) 球根提供者や植栽ボランティア、マルシェで販売する野菜や果物の地元生産者の人たちとの間に新たな絆や人的ネットワークを形成することができたこと。
- 3) プロジェクト事業が当初からマスコミの注目を集めたことにより、毎年のように植栽事業や彼岸花イベントがテレビや新聞で報道され、国史跡上淀廃寺跡への関心度や知名度が格段に高まったこと。
- 4) 彼岸花の球根提供者や植栽ボランティアの公募は、事業費を大幅に縮減させるとともに、プロジェクト事業のPRに大いに役立ったこと。

上記の成果以外にも、周辺地域においても彼岸花をツールにした、地域づくりの活動を始める団体も複数誕生したことなどがある。これらの成果は、実行委員会のメンバーの積極的な協力や不特定多数の市民の応援によって得られたもので、今後のプロジェクト事業を推進していくうえで、大きな追い風になるものと考えている。又、成果が得られた要因の一つに、プロジェクト事業の目的を共有し、適切な助言や指導、種々の活動への参加等に積極的に関わってきた米子市の史跡担当所管課の存在が大きかったことがあった。

(2) 今後の課題

一方、これまでの活動の中から、今後のプロジェクト事業に関する多くの課題も見えてきた。現時点

では、プロジェクト事業を更に発展充実させていくためには、次の様な課題を克服していくことが必要と考えている。

- 1) 上淀廃寺を訪れる人たちに、上淀廃寺に関心を持ち、その魅力や意義を伝えていくための工夫や方策を講じていくこと。
- 2) 上淀集落の人たちからも少しずつプロジェクト事業への関心や理解が深まってきている。今後この事業を継続するためには、地元の人たちとの協力関係を更に強めていくこと。
- 3) マスコミをはじめ県や市の情報発信力や(株)白鳳のフェイスブック等を活用し、プロジェクト事業の情報をより広範に、よりタイムリーに発信していくこと。
- 4) 多くの人たちが現地を訪れやすくするための交通アクセス、駐車場の整備、案内板の設置などのハード面を整備し、受け入れ環境を充実させていくこと。
- 5) プロジェクト事業を中・長期的に継続していくための安定的な財源を確保していくこと。

これらの課題は、すぐに解決可能なものもあれば、解決に時間を要するものもある。又、中には実行委員会の力だけでは解決が困難なものもある。

(3) 今後の課題への対応

上記(2)の今後の課題の解決方法には、様々な方策が考えられる。ただ、実行委員会では、早急にその答えを求めることはしない。まず、これらの課題についての認識を実行委員会のメンバーや米子市の関係部署の職員と共有するところから始める。行政には、これらの課題を解決するための情報やノウハウを有しており、米子市と実行委員会の協働作業によって課題を克服することが可能な場合がある。

いずれにしても実行委員会では、行政との連携を深めながら、これらの課題についてメンバーと時間をかけて話し合い、知恵を絞り、汗をかくことによって、可能なものから一つ一つ解決していくことを心がけていきたい。

一度に全部の課題を解決しなくても、一つの課題

の解決は、必ず次の課題の解決に連動していくものである。事業を進めていくうえで課題は常に存在し、その課題とじっくり腰を据えて、向き合うことが肝要である。

5. これからも

彼岸花の開花期間は1週間程度であり、1年365日のうちのわずかな期間である。従って、プロジェクト事業だけで、地域を活性化し、史跡を活かした地域づくりができるものとは思っていない。しかし、この短い開花期間中に、多くの人が上淀廃寺跡に集い、賑わい、訪れた人たちがそれぞれの思いを抱きながら、この地で初秋のひと時を過ごすことができる。もしかしたら、プロジェクト事業に関わった人たちが何年か、何十年か後に彼岸花で赤く染まった上淀廃寺跡の丘に立ち、様々な感慨や感動に出会う姿を見かけることができるかもしれない。そんな光景を思い描きながら、これからもこの事業を続けていきたい。

【参考文献】

- 1 『向山古墳群』 淀江町歴史民俗資料館 1990
- 2 濱田竜彦 2016『日本海を望む「倭の国邑」妻木晩田遺跡』 新泉社
- 3 中原 斉 2017『よみがえる金堂壁画 上淀廃寺』 新泉社